

西田とハイデガー

——絶対無の自覚と存在了解——

岡 廣 二

西田は論文「私の絶対無の自覚的限定といふもの」において自己の哲学的立場を一層深めていった。その立場の究極が宗教的立場であることは贅言するまでもない。そして我々の知識は何処から始まるのかの問の下、それは絶対無の自覚的限定の内容たる事実から始まるという。裸の事実などは何処にも存在せず、事実が存在するのは絶対無の自覚的限定に依拠している。

〈ザツへ〉は〈タートザツへ〉でなければならぬ。そこから見ればハイデガーの存在了解も問題なしとは云われない。確かに彼の云う存在は主客対立以前から出立しているから、その点で自己の事実があるということと相類するかも知れぬ。が、その「了解は不完全なる自覚」ではない。西田とハイデガー、両者は実在しないし存在を思索したのであるから思惟の対象の方向性の点では類似性がある。が、同時にその思索遂行の仕方は前者が経験に基づく論理的立場であるのに対し、後者はこれを忌避する実存論的存在論に立つから、その点では相違している。よって表面的に見れば、自覚はハイデガーのいう世界のなにかテゴリーに属し存在そのものを扱うことはできないと見られる。しかし西田の自覚は「論理から自覚へ」ではなく「自覚から論理へ」という具体的実在に立脚したものであり、しかも無の場所からの自覚であるから了解より存在に肉薄してこれを包摂し得るのである。曰く——「私の絶対無の自覚的限定の立

場からは：ハイデッゲルの了解の立場の如きも含めることができると思ふ」。西田が絶対無の自覚となす事由、それは自覚の真の主体が決して見られずノエマ化されないからである。よってそこからの限定は事実を事実として産出し、事実は自覚と共に存在に至るのである。事実が単にあるのではない。事実は絶対無の自覚的限定によって始めてその存在性を〈タートザツへ〉として確保しうるのである。他方の了解、それは実存範疇であって認識論的に知識を獲得するというよりは企投と結合して現存在の存在可能を導く契機となるものである。単なる存在者でない現存在は可能的存在であって、常に自己に先んじてその存在可能の実現を目指している。そしてそこに働くのが存在了解であるから、了解の対象となるものは已成の存在者であり、既存の存在者なのである。つまり了解の対象は既にして世界の内に於いて存在している存在者なのである。よって了解には自覚のような対象的事実の能産性はない。自覚が自覚と共にその対象を産出するのに対し、了解は既存の事象の了解なのである。ということはそこに〈見るもの〉・〈見られるもの〉があるということであって、了解現象は二元的な構造なのである。自覚は「自己が自己に於いて自己を見る」ことであるから云わば一元的である。一元的といっても「自己」の根底は〈見るもの〉のない「無」なのであるから一即多元的になる。そこに大きな相異がある。問題はその相違の出処如何である。率直に云えば、それはハイデガーの自己把握が不徹底だからである。世間に紛れて現存在が良心の呼び声に応じて「本来的な自己」に回帰する時にあっても、「自己」はなおも「自己」であ

って「有」であり、「絶対無」の次元にまで究徹されていない。現存在がまだ「有」として〈見るもの〉に留まっているからこそ、その了解の対象が〈見られるもの〉なのである。

『善の研究』と「宗教的要求」

杉 本 耕 一

『善の研究』「第四編第一章 宗教的要求」は、次の一節で始まる。「宗教的要求は自己に対する要求である、自己の生命に就いての要求である。我々の自己がその相対的にして有限なるを覚知すると共に、絶対無限の力に合一して之に由りて永遠の真生命を得んと欲するの要求である」。この一節は、『善の研究』全体の中で見ると、やや異質な印象を与える。なぜならば、『善の研究』全体の基調としては、「自己」は、大体においてその「無限」の相において、即ち、その根底において宇宙と一であると言われるような「大なる自己」としてとらえられているのに対し、ここでは例外的に、むしろ「自己」の「有限」「相対」の自覚に立つて論が進められているからである。

本発表では、このような異質な一節に注目し、それが『善の研究』の中でどのような意味をもっているのか、また、もちうるのかを考えてみたい。具体的には、この「第四編第一章 宗教的要求」の『善の研究』全体の中の独特の位置を明らかにするとともに、『善の研究』の中にこのような例外的な章が含まれていることの意義について論じたい。

「第四編第一章」の『善の研究』全体の中での位置を明らかにするために注目したいのは、『善の研究』で論ぜられる「宗教」が、いわば二重の構造をもっているということである。

『善の研究』は、「第一編 純粹経験」「第二編 實在」「第三編 善」「第四編 宗教」という四つの編から構成されている。「第四編 宗教」において「宗教」が主題となるのはもちろんであるのだが、それに先立つ第一編から第三編においても、各編の最終的な結びの部分で、「宗教」に属する事柄が既に論じられている。本発表の関心事である有限相対の自己という視点は、もっぱら「第四編 宗教」でのみ出されるものであるから、「第四編第一章」の位置を知るためには、前者とは異なる後者に固有の立場を明らかにしなければならない。

第一編から第三編までの「宗教」は、「学問道德の本には宗教がなければならぬ、学問道德は之に由りて成立するのである」という言葉からも分かるように、「哲学」を支え、それを基礎づけるものとして位置づけられる。「純粹経験を唯一の實在としてすべてを説明して見たい」という『善の研究』の「哲学」としての企図は、「宗教」の次元にまで話が進められることによって、はじめて完結する。その意味で、ここでの「宗教」は「哲学」と親和的である。また、「哲学」と区別された「宗教」固有の問題が問われることがないという点で、「哲学」の範囲内の「宗教」とみなすことができる。

それに対して、第四編の「宗教」においては、むしろ、「哲学」に余るものとしての「宗教」の姿が見られる。「自己」が有限相対の自覚をもち、「宗教的要求」を起すということも、